
Black Back

宿野部 湊闇

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Black Back

【Nコード】

N9159K

【作者名】

宿野部 漆闇

【あらすじ】

西暦2040年頃

世界は混とんしていた。各国はテロリストは激化し、対策に追われた。

そんな中、国連は新たな組織を作り出した。

これは、少年たちの物語である……

一部内容には日吉先生の小説に登場する人物や名称が出てきます。そちらが気になる方は下記へ

Prologue

2001年9月11日

現地時間午前8時46分

アメリカニューヨーク州にあった当時で世界でも有数の高さを誇っていた世界貿易センタービル北棟にハイジャックされた飛行機が衝突した。

それは当時では世界最大のテロ事件として名をはせることとなる
とはこの時は誰も知らないでいた。

午前9時3分

ハイジャックされた飛行機が今度はWTC南棟に衝突する。

その35分後には一アメリカ国防総省本庁舎に3機目の飛行機が衝突し一部破壊される。4機目の飛行機もあったがワシントンD・Cより240キロ離れた場所に墜落した。

後にこの事件をアメリカ同時多発テロまたは9・11テロ事件と呼ばれるようになり、それまで水面下でのテロ行為が浮き彫りにされた事件でもあった。

死傷者の数はおよそ1万人以上に上っている。

2005年7月7日

現地時間 午前8時50分

イギリスロンドンに置いて地下鉄3か所がほぼ同時刻にその1時間後にバスが爆発するテロ事件が発生した。

9・11テロ事件より負傷者は少ないものの800人程が死傷した。

2015年10月31日

カナダにある原子力発電所が爆発。敷地内にある8機すべてが崩

壊し放射能が半径数百キロに及ぶ大惨事となった。これによりカナダ当局及び、アメリカ政府は汚染されたすべての地域を無期の地域封鎖を決めると同時にこの事件は反政府によるテロ行為だと見解する。

その後も1、2年に一度の周期で大規模なテロや破壊、拉致、誘拐など人道に反する行為が何年にもわたって続けられ世界中の人々はテロに怯えるように暮らすようになっていった。

その中で、民間には銃器の売買をすることが無かった日本でも2023年に六法の大改正によって法律が大きく変わったのだった。特に銃刀法とそれにかかわる法律が変わり、民間にも自衛目的として銃器が出回るようになった。しかしそれは銃犯罪の激化を意味していることには閉じの政治家にはまったく分かっていなかったのだ。

次に改正された日本の自衛隊が撤廃。第二次世界大戦後の自国軍として『国防軍』を創設した。これにも諸外国の猛烈な反対にもあったが、増加する組織的、大規模テロや外国人犯罪などに対抗するにはこの道しかないと考えられこの案を押し切ったのだった。

そして、日本は2030年までには世界でも有数な銃犯罪国と名をあげることになってしまった。

2038年夏

国連の安保理で新たな部隊を各国に新設する計画が持ち上がった。その名前は、

S p e c i a l .

C h i l d r e n .

A s s i s t .

T e a m .

と言い、S・C・A・T.という略称で呼ばれる特殊救助隊だった。

P r o l o g u e (後書き)

どうも、こんにちわ。

これは、元々あった小説のリメイクです。

より楽しくしたいと思いますのでよろしくお願いします

P r o l o g u e 2 水谷佑介・麻紀（前書き）

この作品はフィクションです。

登場する人物団体等は架空のもであり、同一のものであっても一切何の関係ありません。

Prologue 2 水谷佑介・麻紀

2037年7月某日

江の島より南に十数キロ離れた海上に木^{きの}焚島という半径5キロほどの人工島は、日本有数の高級住宅地である。

その島の中で一際大きな館がある。ガラスで表札には水谷という名前が刻まれていた。

館の絨毯が敷かれた廊下に初老に近い男が歩いていた。

この男は身体に似合わないスーツを着て、ある部屋を目指していた。

部屋の前まで着くと一度、深呼吸をし、ドアをノックする。

「誰？」

部屋の中か幼い子供、それも男の子の声が聞こえてきた。

男はフツと口を緩め、

「玄馬です。祐介様、麻紀さま準備はできましたか？」

「ちよつと待つて。僕は大丈夫なのだけど、麻紀の準備がもう少しかかりそうなのだ」

「旦那さまや奥さまはもうロビーでお待ちですよ」

部屋の中の様子を想像しクスクスと笑った。

もう何年も一緒にいるから中の様子は手に取るように分かるので祐介が麻紀にいろいろと手伝っているのだろうと思いつかべていたのだ。それが普通であり、また、平和な証拠でもあったのだ。

「わかったわ。お父様とお母様にすぐ行くから先に乗ってて伝えておいてくれますか？ ジイ」

「かしこまりました。麻紀さま」

ジイと呼ばれなぜかむずかしくなったがとりあえず承知したことを伝え、彼らの親の所に向かったのだった。

部屋の中ではタキシードを着た祐介はライムグリーンのロングドレスのリボンを結んでいた。

「これでよし」

彼女の肩を叩き、準備ができたことを伝えたと、クルリと周り一回転をする。

ツインテールにした祐介と同じネイビーブルーの髪、スカートと一緒に着いているオーガンジーフリルを翻して屈託のない笑みを浮かべている。本当に満面の笑みで祐介もつられて微笑む。

「ありがとう。祐二」

麻紀はほほ笑みを浮かべながら彼に抱きつく胸の中にうずめる。これは彼女なりの照れ隠しであることをよく知っている祐介は髪が崩れないようになると、

「そろそろ、お父様の所に行こうか」

アンティーク調の指針式の腕時計を見て、そろそろ出ないと遅刻になりそうな時間だった。

「うん！」

麻紀は顔を上げて、彼の顔を見ると元気よく返事をしてから離れると、手をつなぎ一緒に部屋を出て両親のもとに向かう。

ロビーを出てすぐに止めてある黒塗りの高級車に乗り込むと彼の父は窓を開けて、

「それじゃあ、玄馬さん家の事を頼みます」

「承知しました」

いつものように家の事を執事の玄馬に任せると車を出すように指示を出し、パーティーのある会場に向かった。

彼の父親は世界でも有数の多国籍企業「ワールドウィンワークス」《WWWW》の社長で母親はその秘書を務めている。今日はその父の水谷誠の誕生パーティーが開かれることになっていたのだ。

木埜島から地下道を通って首都高に乗りそこから台場にあるホテ

ルまで行くという一時間半の道のりだ。

船を使うこともできるが麻紀は酔いやすい体質らしく彼女が一緒のときはなるべく乗り物は使わないようにしていたが、こういうときは仕方がなく、なるべく運転のうまい運転手を雇い、揺れを少なくすることにしたのだったが、案の定、麻紀は車用をしてしまい、途中でトイレに駆け込んで戻してしまった。

「大丈夫？ ほら」

彼女が車に戻ってくると祐介は彼女のポーチからピルケースを取り出して、酔い止めの薬を渡す。

「ん。ありがとう」

彼女は恥ずかしいのか少しうつむいて言う。それを見て祐介はほぼ笑って優しく背中をさするのだった。

その後は何も起きずに台場のホテルに到着するとVIP専用の通路から入り、地下のパーティー会場に入るためエレベータに乗り込む水谷一家。

「祐介」

エレベータが動き出してすぐ誠が彼の顔を見ないで言う。

「ハイ」

父の顔を見てまるで機械の様な返事をする祐介。

「会場に入ったら麻紀の世話をしろ。私たちは招待客で君らを見ている時間は無いからな」

父もまたどこか冷徹さがうかがえる様な話し方をする。

「わかりました。お父様」

その時、エレベータのドアが開き、廊下を通り、会場に入る。

会場には『WWW』の重役やその親族。大物政治家、芸能人が多くその中にはマスコミ関係の人も少なからず来ていた。

すでに会場に入った途端に両親の周りに人が群がると、

「麻紀。おいで」

彼女は一回頷くと祐介の袖口をつまむように持って離れないよう

するのを見てから、邪魔にならないようにその場を離れた。途中テーブルに置かれている食事を皿に乘せて壁際による。

同年代の子供は何人か見かけたがこのころはなぜか友達という存在が理解できないでいた祐介はさほど関心が無かったし、話しかけようにどう話しかければいいかわからなかった。

会場が暗くなり、入り口から見て正面の小さなステージにスポットライトが集中する。

パーティーが始まったのだ。

「この度、トリプルダブル代表取締役社長、水谷誠の誕生パーティーにご参加いただき、誠にありがとうございます。わたくし司会を務めさせていただきます。」

役員の1人である司会役の人が決まったような台詞を話し始めた。

空になった皿を適当なテーブルに戻し、暇で大きなあくびを噛み殺しながら麻紀を見る。彼女も暇なようで眠そうな顔をしていた。

「ねえ、此処いいかしら」

突然の声で驚いて声がした方を向く。

「え？ あっ、いいですよ」

スポットライトから漏れる光が逆光となってシルエットのようになってるが容姿と声からして女の子のようだ。

彼女は小さく笑うと、

「私は美香。原田美香って言うの。あなたは？」

「僕は祐介。こっち、アレ？」

いつの間にか後ろに隠れている麻紀の背中を押す。

「この子は妹の麻紀」

麻紀はぎこちなく頭を下げる。

「それでは、しばらくお寛ぎ下さい」

進行役の役員が壇上から離れると同時に部屋全体の明かりが元に戻り、シルエットのようになっていた輪郭もゆっくりと美香の身体に色を付け始める。

美香は青い中国風な青いドレスで身を包み日本人独特の黒髪を長くのばして、とても可愛らしく清楚な印象を彼に植え付けた。

「ねえ、ここから出ましょ？」

美香は言うが早いのか、祐介の手を引き、麻紀もずっと服の袖から手を離していなかった。まるでムカデ競走でもしているかの様な気分になる。

会場の外は中とは打って変わり静かで、会場が聞こえてくる人々の声がつつすらと聞き耳を立てないと聞こえないくらい本当に小さく聞こえる程度だ。それに外でも大人たちが談笑している声やBGMもなぜか小さく聞こえまるで別世界にいるような感じさえ受けた。美香とはすぐに仲良くなれた。美香の両親と祐介達の両親が知り合いだったのと、美香が祐介と同じ歳で麻紀も本当の妹の様に接してくれたおかげで、人見知りが激しい麻紀もいつの間にか、たどたどしいながらも祐介と二人の時とさほど変わらない話し方だ。

そんなことを温かい目で見ている祐介に美香は気付きニッコリと笑う。

祐介もつられるように笑うと、進行役の役員の声が廊下にも設置してあるスピーカーから聞こえ、

「あつ、もうすぐお父様のスピーチが始まっちゃう。ごめんね、私、戻らなきゃ。後で又会いましょう」

そう言っただけで中に入って行く美香。

「祐二イ。私たちも中に入る」

麻紀は彼の袖をひっぱり邪魔にならないように中に入る。

祐介が中に入った時、普段は機材や備品の搬入に使うエレベータに五人くらいの黒い集団がエレベータのドアのほんの僅かな隙間から廊下をうかがっていた。

「やれ」

小型暗号無線機に小さく一言言う。

祐介は誠の所に行こうとした時、ほんのわずかだった光が消え、急に真っ黒になった。

「しばらくお待ちください」

司会役の声ではなく別の声だった。おそらくホテルの従業員の声だろうと祐介は思った。

今動く人と人に迷惑がかかると思ってその場でじっとしていると、突然後ろから布のようなもので口と鼻をふさがれ声を出す暇もなく意識を失ってしまった。

明かりが元に戻ると祐介達の姿はなく、ドアには地球に剣で刺しそれに絡みつくように蛇がからみついた絵があった。その絵は世界最大規模にして最強最悪のテロ集団『スカイコブラ』のマークだった。

？

Prologue 2 水谷佑介・麻紀（後書き）

第二話投稿しました。

実質第一話なんです、この話は実は……っと言っては面白くないですね（汗）

Prologue 3は一週間後を目途に投稿したいと思います。

感想や評価も待ってます。

面白くなくてもアドバイス（誤字脱字も含む）なども待ってます！

Prologue 3 原田 美香

祐介達が住んでいるところから百メートルも離れていないところ、つまりは木柵島の一角にある家族がいる。

「まあまあ、可愛いこと」

ウェーブのかかったブラウンの髪をまとめた女性は、中国風の青いドレスに身を包んだ少女を見て、まるで子供のように嬉しそうに彼女を眺める。

「そ、そんなことないよ」

普段は着ないドレスにほんの少しの化粧で少女は嬉恥ずかしくて顔を赤らめはにかんだ笑顔を見せる。

「そんなことあるわよ。まるでお人形さんみたい」
相変わらずほほ笑む女性は文字通り少女に姿になめるように見つめる。

「ちょ、こら。お母さん。ホントになめないの」

本当になめる母親を引き離す。何の悪びれる様子もなくむしろ納得していない表情を見せる。

「そうだ。せっかくカメラ持ってきたんだし、写真撮ろうと」

丸机に置いてあったプロが使う一眼レフのカメラを手に持った。

「ウオッホン」

いつ来たのかさっきまで閉まっていたドアに堅物そうな男性が咳払いをした。

母親はその人をみてさっきよりもっと不満な顔をする。

「すまん、美奈子。もう時間が無いんだよ。美香の写真は家に帰ってからでもいいだろ？」

男は彼女が持っていた、カメラを取り上げると、高級そうな時計を見て言う。

「すぐに終わるからいいでしょ」

まるで子供のように頬を膨らまし上目で、男を見る。

男はこう言う態度をとられるのが苦手なようで、一瞬ひるんだすきにカメラを奪い返し、女の子を撮って、撮って、撮りまくっていた。

「家族と一緒に撮りましょう」

最後にはこれが出てきた。男はもう諦めたのか渋々彼女たちの隣に立ち、使用人にカメラを渡す。

「いきますよ」。はい、チーズ」

少女の名前は原田美香。

今日は『WWW』社長で美香の両親の旧友である水谷誠の誕生パーティーが行われるので、普段は着ないドレスに身にとっていた。美香の両親も企業を興し成功し、今や国内でも5本の指に入るほどの業績をあげている。そのほとんどはある程度のスキルを施したロボットである。

会場に着くと『超』が付くほどの有名人や時の人達が来ていた。大きくため息をつく父親が視界の端で見えた。きつと、さっきの事を思い出してため息をついたのだとわかる。でも、あれは母のいつも悪い癖なので美香にはもう慣れてしまっていた。

「美香」

会場をゆっくりと回っていると不意に父親が呼ぶ。

「ほら、そこに2人、美香と同じ年の子が見えるかい？」

父親が指をさす。指した先に目を向けるが、人だかりができていてよく見えないでいた。彼女はもういちど父親を見るとニツコリと笑う。

もういちど指した先を見ると一瞬だけ人と人の間に隙間ができ、その奥に男の子と女の子が見えた。

「あの子たちがどうしたの？」

不思議そうな顔をして父親を見ると、

「この主役のお子さんだよ。たしか、男の子の方は美香と同じ年だったはずだよ」

美香は彼らを見ようとしたが、会場が暗くなってしまったので、見ることができなかった。

主役って、確か『WWW』の社長でお父さんの友達ね。男の子は私と同じだからきつと話が合うわよね。挨拶でもしにいこうとおと……アレ、どこに行っただろう？」

いつの間にか両親がどこかに行ってしまったことに気付くが

ま、いつか。後で言えば。

と楽天的な考えをしてとりあえず隅によって歩いていると、さっきの子たちが寄りかかっていた。

「ねえ、ここいいかしら」

男の子は驚いたように振り返る。

美香は思わずクスリと笑い、

「私は美香。原田美香って言うの。あなたは？」

「僕は水谷祐介。こっち、アレ？」

祐介の後ろに隠れてみている女の子を背中を押して、

「この子は、妹の麻紀」

麻紀はぎこちなく頭を下げる。

進行役の役員がしめの言葉を言う与会場が明るくなり、祐介達の姿がはつきりとわかるようになった。

祐介は濃紺の髪が頬のあたりまで伸びているが、鮮やかなブルーの目際立って見えた。

麻紀はライムグリーンのロングドレスを来ていて腰に着いているリボンとツインテールにした濃紺の髪が可愛かった。

「ねえ、ここから出ましょ」

美香は言うが早いか、彼の手を引き、会場の外に出た。

会場の雰囲気というか、人が多く集まるところがあまり好きでは

なかったのだ。

会場の外で数人の大人たちが談笑をしていたが、中に入るよりはましかなと思う美香。

しばらく話していると、進行役の人の声が聞こえてきた。

「あつ、お父様のスピーチが始まっちゃう。……ごめんね。後でまた会いましょう」

そう言つて急いで中に入つて行く美香。

美香は父親のスピーチが『大』が3個付くほど好きで、今までにも何度も聞いてきた。お父さん子というのもあつたらしいがそのことは触れないでおこう。

壇上近くまで来ると、ほんのわずかな明かりだった部屋が急に真っ暗になったが、父親のスピーチで気分が高まりそのことにはまったく気付いていなかった。

そして、彼女の姿も跡形もなく消えていた。

？

Prologue 3 原田 美香（後書き）

一週間後と言いながら十日余りが過ぎててすみません。

ちよつとしたトラブルがあり今になりました。
そんでもって、描いてて気づいたんですけど

内容がほぼ一緒だ〜

というわけで、次話は数年後の話になります。
一応、四日後を目途に投稿したいと思いますう。

始まりは教会から

西暦2042年3月末

東京郊外にあるとあるき教会がある、隣は教会が運営している孤児院がある。

とある部屋で1人の少年が目を覚ました。

窓からのぞく外の世界は薄暗く朝靄が出ていた。

少年は同室の子たちを起こさないように静かに起き上がり、ベッドの下から荷物を出した。

音を立てずに部屋から出て、孤児院と教会を結ぶ渡り廊下を渡る。孤児院からすぐに道に出ることができるが、今は門が塞がれていて鍵がないと出られないのと、仮に鍵があつたとしても重く寂が付いた鉄の柵が大きな音を立てて孤児院の子たちを起こしかねないからだった。

教会の方かというと、誰でもはいれるように入り口の鍵はかかっていないので容易に出ることができる。

少年はあの日から考えてとった行動だった。

教会は神聖な空気と外の冷たい空気で少年の吐く息が白い煙となつて出てくるのを無視し教会の外に出る。

「加藤君」

教会の階段を下りてすぐ、少年の名前を呼ぶ声がして振り返る。

さつき、出てきたところに40代くらいの男性と、修道服を着た20代半ばの女性が立っていた。

「神父さん。それにシスター……なんとか」

少年は多少驚いたがあまり気にすることなく言う。

「わざとね。絶対わざと」

シスターらしかぬ仁王立ちをして怒ったような口調で言うシスター

！。

「もう行くの？」

いきなり態度が変わるシスターに半ばあきれつつも、いつもの子だからと気にしないようにしている。

「行きます。ホントならあの子たちにもあいさつしなきゃいけないと思うんですけど……」

「ならちゃんと挨拶しなきゃ」

少年の言葉を最後までできずにシスターが言う。これもいつものことなのでたいして気にはせず、

「わかってる。けど、あの子たちの悲しいかを見たくはないんだ。きつといけなくなっちゃうから。だから……だから昨日みんなに手紙を書いて枕の横に置いておきました」

少年はちらりと神父を見ると、コクリと頷き優しいほほ笑みを浮かべた。

「そう」

悲しい目でシスター麻利亞は言う。あまり見せないその悲しい顔を見て、少年は一瞬ドキッと胸が高鳴った。

「つらくなったら、いつでも戻ってきなさい。ここは透君の家なのだから」

優しくほほ笑みかける神父様。その言葉で少年は感謝の心で一杯になった。

「ハイ……そろそろ始発のバスがきますので、失礼します」

少年はそういつと歩き出す。が、数歩で止まり振り返って、

「神父様、シスター麻利亞。お元気で」

深々と頭を下げ別れの挨拶をし、逃げるようにバスの停留所に向かった。

少年の名前は、加藤透。

ある事件がきっかけで孤児院に入所し、2年を何不自由することなく過ごしていた。

歳は12で本来ならば中学に入学する予定であった。そう本来なら……

バス停に着くのと同時に始発のバスが止まる。

透はバスに乗り込みバスターミナルに向かい、そこから高速バスに乗り換えた。

二人掛けのシートに座り開いた空間に荷物を置くと、どこから出てきたのか 異様に膨れ上がった封筒がボトリと床に落ちた。封筒を拾い上げ中身をみるといくつもの紙束が入っていた。

その中の1枚を出してみても、透は思わず泣きそうになってしまった。

それは孤児院みんなからの手紙だった。

ーきつと、あいつの仕業だな。

頭の中で悪戯っ子の笑みを浮かべているシスターの顔が出てきて、ため息の後に笑みがこぼれていた。

透は手紙を読んでは仕舞いを繰り返して、最後の手紙を読む。

『拝啓 加藤透様 いや君でいいかな

まさか君がこんなに早くここを離れるとは思ってもよらなかったよ。此処を出ていくといった日、私は始めて君に会った日のことを思い出してたのだよ。

始めてあった君は表面上では明るくふるまっていたようだけど、長年教会の神父と孤児院の院長の経験から君の心、いや身体もボロボロでいつ居なくなってしまうか心配で片時も目が離せなかった。

だが、あの子たちが君の心も身体も癒してくれたようで、私は今、君が出ていくことを快く送ることができたらと思う。

身体に気をつけて、困っている人を助けなさい。きっと神様も見守って下さることだ。

P.S. たまには戻ってきて子供たちの笑顔を見に来てほしい。子供たちもきつと喜ぶだろうから。

孤児院院長兼教会神父　立花誠一

その手紙は神父様からだった。

手紙をしまいながらホントにいい人だと思う透。手紙の入った封筒を大事にカバンの奥に仕舞いこみ、透はこれからのことを考える。

行先は里親ではない。俺は、時代の流れに乗るのだ。

今の時代は混とんとしている。各国の地域でテロや犯罪が行われていた。日本も例外ではなかった。そのせいもあってか日本の法律が大きく改正され、自衛隊は撤廃し代わりに国防軍と言う偉い名前に変わった。銃刀法での改正もされ、民間での使用が緩和され、ライセンスさえ持てば誰でも自由に所持ができるようになったが、政治家が甘いのか世界がそうさせたのかアメリカに次ぐ銃犯罪国家になってしまったのは言うまでもない。

だが、精巧な部品などには世界が認めていていた。

今や大企業となっているケルビム社。製薬会社から始まりいろんな分野に手を出し今や軍事関連やロボット工学では上位の座にいる大企業。次いでWVGである。これはもともとは不動産から始まり医療器具、玩具、ホビー、軍事関連などに手を伸ばしケルビム社よりはやや劣るがそれでも世界で見れば上位に入る。

WVGに次いで余りかのMS者である。もともとはコンピュータ関連から始まり20世紀末には世界的シェアをもつOSを作り出した。今はそれに加えて一般家庭用オートマタと呼ばれる制限付きAIや製造をしている。この3社をKWMと呼ばれている。

透もその混とんの中に入ろうとしていたのだった。

？

山道

透は電車を乗り継ぎ、関東北部にある赤城山行きのバスに乗っていた。

平日の朝とういうだけあって満員とまでは行かないがそれなりに人が乗り込んでいく。

透は1番後ろの席に座り荷物を膝の上に置く。そして、窓の縁に肘を置き駅から段々と緑が増えていくのを眺めていた。

幾つかのバス停を越えた頃、少女が2人バスに乗りこむ。

1人は焦茶の髪をポニーテールでまとめ、透とほぼ同じ身長の少女。

もう1人は紺の髪をショートカットにし、ポニーテールの少女より少し小さめの女の子。

そんな2人は透の席の前の席に座り談笑始めた。

バスに揺られる間、2人が透の事をチラチラと見ていたが透は相変わらず窓の外を見ていた

山の中腹にある駐車場のバス停でバスは終点になり、透は荷物を持って降りた。

外は空気が冷たく霧が出ていた。とはいえ、まったく見えないほどではなく150mの山頂がうつすらと見えるか見えな程の濃さなのでさほど気にする人もいない。

「えーと、確かこの道を行ったあたりだったな」

透はポケットからケータイを取り出し、呟き歩き出した。

その後ろではこっそりとみていた少女たちが透の後をゆっくりと着いて行くのだった。

10分ほど登った辺りから透は背中に視線を感じていた。

透はさりげなくケータイの地図アプリを見るふりしながら、さ

りげなく後ろを見ると少女たちが急いで木の陰に隠れるのを見流さなかった。そしてあること思いつきニヤリと口を緩めせると何事も無かったかのように再び歩き出す。

少し歩くと二人の姿が林で隠れるのを見計らい、透は勢いよく走り山道を走った。

少女たちは透がいなくなったことで一瞬、顔を見合わせたが、すぐに透の後を追う。が、カーブを曲がっても透の姿はどこにも見当たらなかった。

「あれー？ あの子さっきまで居たのに」

ポニーテールの少女は不思議な顔をしながらあたりを見渡すがそこには彼女たち以外いなかった。

「どうしよう？ もしかして……遭難！？」

真面目そうな口調で言っているが、顔は破顔していた。

「まったく……それで、これからどうする？」

ショートカットの女の子は呆れたような顔をしていた。

「うーん。どうしようかね」

「あんたら、何してんの？」

少女たちはいきなり後ろで声をかけられ振り返った。

「え？ あっ」

声をかけたのは透だった。そして気付いたのはショートカットの少女で、もう1人は口をパクパクさせながら透がいるところと反対の道を交互に指していた。

「……もしかして、気付かれてました？」

気まずそうな声を出しながらゆっくりと話すショートカットの女の子に対し、透はニツコリとほほ笑んで頷く。ショートカットの女の子の方がまったく驚きもせずただ単に樹まです疎な声を出していることに透は気づくが、その時の透はそういうところにはあまり関心はしていなかった。

「バスに乗った時から俺の事ちらちら見てたけど、まさか後を付け

られるとは思わなかったよ」

「あ、アハハハハ」

ショートカットの少女は明らかな乾いた笑い方になり、透もつられてクスクスと笑ってしまった。

「ま、まあ、ついてきた理由はなんとなく分かるけど、こそこそと人の後を付けるのはあまり良くないな」

透は咳払いをした後そういうと、ショートカットの女の子は頭を下げてから、口早に話す。

「ごめんなさい。実は私もこの馬鹿なお姉ちゃんも地図を忘れてきちゃったみたいで、あなたを見て、後を付いていけば同じ場所に行けると思って」

「謝らなくていいよ」

透はニツコリと笑い彼女の肩を軽く叩いた。

「でも、君の姉に馬鹿はないんじゃないかな？」

透が歩き出すと、彼女たちも付いてくるのを確認してから言う。

「そうよ。馬鹿はないじゃない」

ポニーテールの少女も彼の言葉に便乗して言うと、

「いえ、馬鹿です。私より頭悪いしちよいちよい変なことに首を突っ込むしドジだし」

透は苦笑いを浮かべていた。ショートカットの少女は延々と姉への悪口やらなんやらでどんどん小さくなっていく姉がだんだん小さくなっていくような感じがしてきた。

そろそろ、彼女を止めないと大変なことになるかなと思った透は、

「ちょ、ちよつとストップ。君の姉への不満が多いのはわかったがあれを見てごらん」

透はポニーテールの少女を見ると、今にも泣きそうな顔をしてこちらを見つめていた。

「いいんです。あれで、いつもの事ですから」

いつもかいと突っ込みを入れたところをなんとか押さえ、なんとか話題を変えようと思案して、

「そ、そういえば自己紹介まだだったね」

透の苦し紛れに出した答えがこれだった。

「そうでした。私は原田美香。今年で14よ」

いつの間にか泣きそうな顔から元に戻っているポニーテールの少女、美香が言う。

「私はこの馬鹿の妹で茉衣よ。今年で13。よろしくね」

ショートカットの少女、茉衣が満面な笑顔を見せると、透はドキツとし昔見知った女の子が浮かんだが、まさかなと思いなおした。何年も探したその女の子がこんな簡単に近くにいることがあり得ないと思えたからだ。

「俺は加藤透、今年で14になる」

透が言うとは度目になるかわからないがまた驚いた顔をして

「14」

と声をそろえて驚いたように言う。

「もつと上の人かと思ってた。」

茉衣が言うとは美香も頷く。

「みんなそういうよ」

透は苦笑いを浮かべる。確かに同年代の人と比べると顔立ちが大入っぱく見える。そのことは透もはつきりと自覚していた。

「そっか。私と同じ歳か」

と美香は呟くが2人に気づいていなかった。

三人は舗装された山道を歩きだして道が二股に分岐している場所に出た。そのうち一つは通行不可の大きな柵の様な遮断機が下りていて、『軍事機密につき』と小さく青い文字で書かれた下に『通行不可』と書かれた赤い文字と交通標識と大きく書かれた看板が柵の様な所に取り付けられていた。

「どっちに進むの？」

茉衣が透に聞くと、彼はケータイを取り出して目的地までの地図を確認すると、遮断機が下りている道を指し示した。

「ホント？」

美香は確認を取るように聞くと彼は無言で頷き先に進む。美香も続くように透に続くが、一瞬困惑したような表情を浮かべる茉衣だったが、どんどん先に進んで行ってしまう二人を見て急いで後を追う奥へと進んで行った。

最初は舗装されてゆがみなどがなかったが、だんだんと道が荒れ始めさらに奥へと進むと舗装された道がなくなり代わりに土が見える悪路になって行った。

透達は無言のままさらに奥へと進むと不意に透が立ち止まった。

「アレだ」

呟くように言う透だが目の前にあるのはただの雑木林。軍事施設どころか家の一軒もないただの森の中だった。一つ大きな違いと言えば土を抉ったようになっていいる五メートルほどの高さがある崖だった。

「アレって、どれよ」

美香は不思議そうに問いかけると、透は再び指で指し示すと崖の下に一人誰かが立っているのが見えた。

透達はその人物に近づいてみると、国防軍の軍服を着た二十代後

半の女性であることが分かった。

「訓練生の合格者の方ですね」

女性が静かに凜とした声で三人に言う。

「えっと」

いきなり問われてどういつていいのかわからに美香と茉衣に対して、透は冷静に返答する。

「そうですけど、あなたは？」

「『ただ』の案内係です」

女性軍人は透の問いかけにニツコリとほほ笑む。

透は『ただ』という言葉が妙に強調した言い方だったことに少し違和感を覚えた。

「『ただ』……ですか」

「ええ、『ただ』の案内係です。何か問題でも？」

「いえ、なんでもありません」

透はこれ以上言っても軽くあしらわれることになるだろうと思いそれ以上は何も言わなかった。

「この奥は軍事施設なので、一応確認させてもらいます。受験票と合格证、それと同意書を見せてください」

三人は各々のバッグから言われたものを彼女に見せる。

女性軍人はそれを受け取り、偽造や不備がないか確認する。

「確認しました。それでは、私についてきて下さい」

女性軍人はクルリと背を向けると、何かし始める。

カタカタという音がなり終わると、崖だったものがゆっくりと沈み始め、一分もしないうちにトンネルができていた。

女性軍人は何食わぬ顔で先導にして進むこと数分。トンネルから出てすぐに目の前に二重のフェンスで周りを取り囲んだ施設が現れた。

そのフェンスの一部にコンクリートで固めてある監視小屋まで歩いて行くと、一度敬礼をして、

「S・C・A・T・候補生三名お連れした。確認を」

女性軍人はさつき渡した書類を監視小屋の人に見せると、

「確認した。中に入ってよし!!」

と声高く言う。監視小屋の人も敬礼をすると女性軍人も続いて敬礼をした」

フェンスのドアが開くと、女性軍人は敷地の中に入って行き三人もその後を続いて行く。

時折聞こえる、銃声や重機の軋み音が聞こえる中、一つの建物の中へと入って行った。

中はまるで学校の授業中の様な静けさがあった。

案内された部屋は教室の一室の形で、デジタルボード（黒板をデジタル化させたタッチ機能やパソコンからの画像を映し出すことができる）や、P C 一体型の机とやはり学校の教室と変わりがない。

「適当なところに座って」

若干堅苦しさが消えた女性軍人は三人に座るように指示した。

三人が座ったのを確認すると、

「改めて、よく来てくれた。私は、陸軍第211特別潜入部隊所属
中村 なかむら 薫中尉である。

S . C . A . T . について説明しよう。」

中尉は一度、彼らを見る。

「S . C . A . T . とは、

S p e c i a l .

C h i l d r e n .

A s s i s t .

T e a m .

の略だ。が、実際は『A s s i s t 』を『A s s a u l t 』になるのだ」

「急襲部隊」

ぼつりとつぶやくように言った茉衣、中尉は彼女の声が聞こえたのか一度頷き、

「そつだ。急襲部隊が本当の名前だ。」

なぜ名前が変わっているのか？

それは、敵側による攻撃を防ぐためのものと一般市民を巻き込まない為の救命処置だ。

表向きは災害救助部隊だ。実際にこれを行う場合もあるが、部隊の実質も目的はテロリストたちの撲滅だ。われわれはテロリスト撲滅のため集められたのだ」

中尉はもういちど彼女たちを見る。さほど驚いていないことには彼女も驚いていない。このことは受験を受ける前の説明で一度説明を受けていたからだ。そのための同意書でもあったのだから。

「さて、S・C・A・Tには第一から第四部隊まで分けられ、さらに班によってさらに細分化されている……」

中尉は時折、説明をとめて質問があるかどうか確認しながら説明を続けた。

その後の内容は各部隊の主な目的や施設の説明、カリキュラムの概要の説明をした。途中、関係者の一人が彼女に大きめな封筒を渡すといった場面もあったが、そのほかは何の問題なく説明が続いた。少し詳しく言うなら、

第一部隊はほぼすべての任務を遂行する部隊であり、他の部隊より出動回数が最も多い部隊。

第二部隊は、爆弾処理を主軸とした任務と第一部隊のバックアップ。

第三部隊は、潜入捜査を主軸とした情報収集。

そして、第四部隊は事後処理と第二、第三部隊の後方支援などであった。

それに加えて、各部隊が合同で行う救助もその中に当てはまっているそうだ。

「……以上が、カリキュラムの概要だ」

説明が終わるとさつき、渡された茶封筒からカードを三人に配った。

透はカードを見ると、透明なプラスチックに十数桁の番号が書

かれてあり、その下にローマ字で書かれた名前が彫られていた。

「このカードは、君たちのIDだ。これは、カリキュラムや試験の時に欠を確認するもので君たちの部屋の鍵にもなっている。くれぐれも失くさないように」

確認するようにもう一度、カードを見つめる。

「今日は、ここまでだ。寮まで案内する」

中尉の案内で、寮まで歩く。

寮は入ってきた門（正門なのだ）から、右奥にある七階建て建物で、外壁は白く塗装されていた。

寮の中は一階を丸々ロビーとして使っていて、そこから地階と地上階の階段があった。

中尉と透たち三人は端の部屋に案内されると、ドアに取り付けられた挿入式のカードリーダーにIDカードを指す。

カチャリという解錠する音が聞こえ、ドアを開ける。

中尉が先に部屋に入り、その後を続のように三人も入った。

部屋の中は、家具が対称的な配置になっていて、手前から小さめのクローゼット、収納式の二段ベッド、机が二つという順に置かれ、部屋の真ん中には小さいテーブルがチョココンと置いてあった。さらに、大きな窓の奥にはバルコニーまでもがあった。

「今日から、君たちの部屋だ。ゆっくりと身体を休めて、明日に備えること。それからこの部屋にもう一人入ることになるから期待して待っている。以上だ」

中尉はそういうと部屋から出て行ってしまった。

「とりあえず、場所でも決めない？」

取り残された、三人は適当な場所に荷物を置いてから美香が言った。

「でも、もう一人来るんだろ？ だったら、もう少し待ってからでも遅くないと思うよ」

「うっ、そうだった」

言っているそばから忘れている……というか聞いてない美香に透は内心ため息をついた。

「でも、どんな人だろ？」

「怖い人だったらいやだな」

美香がどんな人が想像している端で、茉衣はそんなことを呟いた。「まあ、どんな人が来るにせよ、これからしばらくは一緒に暮らす仲間だ。向こうもそう絡んでくるとは思わないし、仲良くやって行こう」

透は茉衣を元気づけるように彼女の頭をなでる。

彼女は照れ臭そうに頬を赤らめて、コクリと頷きニツコリとほほ笑んだ。

その瞬間、フラッシュバックの様に、小さい女の子の笑顔が透の脳裏から呼び起された。

まさかな……

透はもう諦めかけていた少女が出てきたことの驚きと戸惑いの表情を浮かべた。

「？ どうしたの？」

「えっ？ いや、なんでもないよ」

不思議そうに透の顔を見る茉衣に透は彼女の頭から手を離れた。「もしかして……」

何やらニヤニヤしながら透と茉衣を見ている美香は何かもったいぶったような口調で言つと、

「な、ちが」

「そ、そうだよ。お姉ちゃん」

慌てて言う二人だが、今にも笑いそうな顔をする美香は、

「私は、まだ何も言っていないけど」

拳げ足を取る。

「あう……」

茉衣は何とも言えない声を出し、透は何とも罰が悪そうな顔を
した。

耐えきれなくなった美香は、大きな声をあげて、笑い始めてしま
った。

「ごめん、ごめん。なんかまだほんの数時間しか立てないのに茉衣
がこうも仲良くなるからさ。少しいじめたくなっちゃっただけ」

ようやく落ち着いたところで美香は目じりに水の粒をためながら
言った。

「だからって、俺をだしにするな」

透は呆れたような口調で言う。

「そうだよ。お姉ちゃん」

茉衣も呆れた表情だったが口調に少し棘が入っているようにその
時の透は感じた。

「だから、ごめんって……あつ」

その時、部屋のドアが開く。

透達は、ドアに注目する。

入ってきたのはさっきの中尉と、もう一人男の子だった。

その男の子を見た瞬間、

「圭介」

驚きとともに大きな声で叫んでいた。

「ほう、知り合いか。まあ、いい。私はこれで失礼する」

中尉はそう言って部屋から立ち去って行った。

「……よう」

中尉が出て行ったあと、彼の第一声はそれだった。

透は一瞬脱力しそうなほど力が抜けたがその場で耐える。なにせ、
今朝まで、彼と一緒に孤児院（おしやういん）で寝食を共にしていたのでまさか、こ
んなところまで来ていたとは知り由もなかった。

「『よう』じゃねえよ」

透はゆっくりと圭介の所まで歩みより肩を組もうとするようにス
ルツと首に腕を巻きつけると一気に締めつけた。

「イデデデデ、死ぬ、死ぬ」

圭介の顔がみるみる血の気が失せ青くなっていくのがわかり、このままでは本当に死んでしまうと思った美香と茉衣は急いで引き離そうとしたのだが、透の腕は見事に首のまわりに絡みついてなかなか外せない。

一分程の格闘の末、透が力を緩ませることで引き離すことに成功した。

「で、なんでお前がいるのさ？」

ようやく落ち着いたが透は圭介に疑問と一緒に殺気もぶつけた。

「実はな、透……俺は」

圭介はいきなり恥ずかしそうな表情を浮かべる。

「……俺は？」

つられて三人同時に聞いた。

「……すきなんだ」

圭介は顔を真っ赤にして恥ずかしそうに言う。啞然としか言いようもないこの場と、冷たい風が台風のように吹く雰囲気言葉も出なかった。

「バナナが」

普段の口調に戻った瞬間。透はいきなり彼にラリアットを決め綺麗に入りその場に倒れた。

「イヤー、びっくりしたよ。ただのボケをかましたのにラリアットで帰ってくるとは想定外だったな」

彼の目が一瞬本気のだった様な思いつつ、再度聞く。

「もう一度だけ聞く。今度ボケがましたら……わかっているよな。」

「ケ・イ・ス・ケ・くん」

満面の笑みを浮かべながら青筋を立て黒いオーラを出しながら言い放つ。

「ハイ、ボクモシケンヲウケテゴウカクシテココニキマイシタ」

いつもは見せない彼の怒気に圧倒され棒読みで言う圭介。

美香と茉衣は、透を怒らせないとその時堅く誓う。

「わかった」

若干黒いオーラが残っているが、それだけ聞いて引き下がる透。

「ね、ねえ、一応、問題は解決したみたいですけど、この子は？」

「ああ、こいつは

美香が少し改まったような透は彼に会う前の、つまりは普通の状態に戻っていた。

「俺は、高橋^{たかはし}圭介^{けいすけ}。よろしく。それにしても君、かわ、すいません」

普通に自己紹介した後、後半は透に睨みつけられたことにより阻止ができた。

「私は原田美香。この子は私の妹の茉衣」

「茉衣です。よろしくね」

二人は圭介と握手をした。

その後、透達四人はベッドなどを決めた後、他愛のない話題で花を咲かせながら荷物の整理をしていた。

「ねえ、私たち施設の場所とかわからないから、ちょっと探検してみない？」

話題がなくなりかけたころ、不意に茉衣が言った。

「おっ、いいね。俺は賛成」

圭介は意気揚々と言う。

「私もいいよ」

「俺も」

美香と透も賛成し、整理が一段落したら行くことになった。

shooting range

四人が部屋を出て、まず向かったのは寮のロビーだった。

ロビーは白いカラーコンクリートの床でワックスが塗ってあるため蛍光灯の光を反射して明るくなっていた。

備品も少なく、避難経路が書かれた寮の地図と薄型テレビの様な掲示板ぐらいだった。

透達は、掲示板の所に集まる。

掲示板には、『お知らせ』『緊急』『試験結果』という項目が出ていて。掲示板の横には部屋の鍵穴と同じ挿入式のカードリーダーがあった。

透は、おもむろにさっきもらったIDを差しこんでみる。すると、項目の横に『更新』と赤い文字で小さく現れた。

「へえー、これってネット掲示板みたいだな」

そっぴいながらも『お知らせ』の項目にタッチしてみる。画面が白い背景に切り替わる。

訓練生各位

訓練生の皆さま、合格おめでとつございます。

また明日、午前九時より講堂に手訓練生入隊式及び施設案内を致しますのでご連絡いたします。

苦しいことやつらいこともあると思いますが、一年間がばって行
きましよう

一通り読み終えた圭介は、案内図を見る。

「講堂は、地下らしな」

「うん、そうみたい」

茉衣も圭介の隣に立って案内図を見てから言う。

「じゃあ、確かめてみる？」

美香の発言で三人は頷いてから地下に向かった。

地下の講堂へ続く廊下も他の階と同じで白く塗られた壁で奥へと
続いている。やがて、食堂と書かれた部屋を通り過ぎて、つきあた
りになったところがドアの場所まで着く。

ドアの上には『講堂』と白いプラで書かれた。

中に入ってみると、小さい体育館位の広さにステージと固定され
た机と椅子が配置されていた。

何かを期待していた美香はがっくりと頂垂れたのを見た透は忍び
笑いをして彼女に睨まれた。

ロビーに戻った透達は少し休憩をした後、外に出ていた。

「次は何処に行こうか？」

まだどこに向かうかも決まっていなくて、適当に散策をしていた
時、透は三人に言う。

「うーん」

美香は軽くうなりながら辺りを眺め始め、ある場所で視線が止ま
った。

「あそこはなんだろ？」

美香が見つけたのは、コンクリートで固めた小さな小屋の様な建
物で、見る限り窓もはまっていない倉庫の様な感じだった。

透達はとりあえず小屋まで来ると、鉄製のドアを開けた。

小屋の中は、ちょうど真ん中に金網と防弾ガラスで覆われたカウンターとその隣に頑丈そうな鉄扉があるだけのこぢんまりしたところだった。

「ホントになんだろう」

「どうした？　ここはまだ使えねえぞ」

カウンターの奥から出てきた仏頂面をした少し太った男性が出てきた。

「いえ、ちょっと気になったものでしたから」

透は少し遠慮がちに言うと、それを聞いた男性は急に顔を緩ませる。

「そうか、そうか。気になって見に来たのか」

その後、爆発したような笑い声をあげる男に、透達は目を白黒させた。

「ここはな、射撃場だ。シューティングレンジ。そのドアから地下にレンジがあるからすきに見ていいぞ」

にこにこしながら言う。男は笑いながらまた奥へと消えて行ってしまった。

「ど、どうする」

取り残された四人の中で最初に口を開いたのは茉衣だった。

「とりあえず、見てみるか」

透がそう言うてから、鉄扉をあけるとすぐに下に続く階段があり、降りてみると、全面無骨なコンクリート壁で覆われて、カウンターについ立が付いているようなところには銃声を緩和するプロテクターがつい立の所にかかっていて、その上から数十メートルの所まで射撃したターゲットペーパーをかけておくレールが設置してあった。

透達は、射撃場の男性に挨拶してから外に出ると、今度は、施設の外れにある大きな建物に来ていた。

射撃場の男性に『あそこも、見ておいた方がいいかもしれない』

と言われたからだった。

「屋外射撃場というよりは実践的な建物だな」

透はその建物を眺めた。

三階建の建物は古びていて所々、何かによって砕けた後や、弾痕の痕が壁に刻まれていた。窓はあらかじめ外されているのか吹きさらしになっていた。

「ん、やっぱり中には入れないみたい」

唯一、防弾ガラスで覆われたドアを開けようとする美香だったが、どうやら、鍵がかかっていたらしくガタガタと揺れるだけで一向に開く気配はなかったのだった。

「仕方がないか。無断で入るわけにもいかないし、それにそろそろ日が暮れるから寮に戻ろう」

透がそういうと三人は頷き、寮に戻ったのだった。

TEST

透達が入隊して半年がたっていた。

施設はほとんど学校、特に中学校のカリキュラムに似ていて、違うところは体躯の代わりに訓練と部隊に必要な知識を学ぶ授業、それに戦術の授業があるだけだった。

「ねえ透。この方程式はどう解けばいいの？」

透達は翌日にある試験に向けて一人を除いて勉強に励んでいる。

その一人とは今茉衣に解き方を聞かれた透だ。

「ここは、まず、これを代入して……そう、それで、そこを展開すると出てくるよ。わかった？」

透は茉衣の顔と問題を交互に見ながら問題の解き方を解説していると茉衣の頭の上に『？』が三つくらい浮かびそうなくらいの顔をして、その後三十分に及んでわかりやすく説明をして、ようやくわかったのか、彼女はニツコリとほほ笑み満足そうな顔をする。

「ありがとう、透。透の説明がわかりやすいからすんなりわかったよ」

という茉衣なのだが、透はもつと早く理解してほしいなと思った。だけど、言うともた面倒なことになるので言わないことにする。

そして、三時間の勉強のうち、ほとんどが透に解き方や説明をしていて、二十分程度しかできなかった。

「私たちはもう寝るけど透はどうする？」

美香が寝る準備をしながら透に聞く。

「ん？ 俺は、もう少し勉強してから寝ることにするよ」

透は一人机に向かい勉強する。その姿を見た後姿が一瞬あの少年を思い出す。心の奥底に仕舞ったはずのあの忌まわしき記憶にある少年の姿が。

あの子は今何してるんだろう・・・って何考えてるんだろう私、ねよ。

美香はその記憶を振りほどこうと首を数度振りそそくさとベッドの中に潜り込み眠りに入った。

部屋はページをめくる音とノートに書き込む音しか聞こえず、透は勉強に集中していった。気付くと時計の針は二時半を少し回ったところを指していたので、勉強するのをやめて、透は眠りに入った。

翌日

無事にテストを終えて四人は敷地内に唯一ある小さな丘（寮の近くにあるのを圭介が見つけ、四人のお気に入り場となっている）に昼食をとっていた。

「テストの手ごたえはどうだった？」

食堂から持ってきたお昼ごはんを頬張りつつ茉衣が聞く。

「俺はまずまずだな」

「私は、手ごたえはほとんどないから自信がないな」

「俺も、あまり勉強してないから自信がないよ」

圭介、美香、透の順で手ごたえの感想を言つと、

「そういう茉衣は、どうなのさ？」

美香が言つと、ギクツと身体がはね、

「わ、私？ 私は……うん、まずまずだと思うよ。……きつと」

目が泳ぎながら明らかな作り笑いに最後の『きつと』がほとんど聞こえないくらいすぐ小さな声で言ったので、

「お前、試験全然できなかったろう」

透が確信をつくように言つと、さらに茉衣はギクツと身体がはね、

「そ、そそそそんなことないよ」

明らかな動揺に三人は笑いをこらえていると、茉衣は顔を真っ赤にして昼食の弁当を一気に口の中に放り込んでいると、

「もし、点数悪かったらみっちり教え込んでやるかな」

透の言った言葉に茉衣はせき込むと、こらえていた笑いが吹き出す美香と圭介であった。もちろん透も冗談で言っただけなのに、やにやと笑っていた。

「さうで、飯も食ったことだし、そろそろ部屋に戻るのか」

圭介は空になった弁当箱を片づけながら言うと、三人は頷き、寮へ向かう。

「ゴメン！ 退いて~~~~~!!」

三人が寮の中に入ろうとすると、勢いよく走ってくる少女に、
「へ？」

と透はトンチンカンな声を上げると同時にゴンという鈍い音と一緒に勢いよくぶつかった。

「イツツツ」

透は頭を押さえながら言う。

「ごめんなさい。ちよつと急いでいたもので」

少女をすまなそうな顔をして言う。何度もぺこぺこ謝る。

「それはいいんだけど、退いてくれないかな？」

透は今、少女の下敷きになり、まさに馬乗り状態になっていたのだ。

「あつ、ごめんなさい」

と少女は頭を下げる。少女が美香の手を借り、透はヨツという声と一緒にハンドスプリングで立ち上がる。

「謝らなくていいよ。すぐにどかなかった俺も悪いんだし」

と少女の肩にポンツと手を乗せる。その時、少女の顔が赤くなつたが誰も気付いていなかった。

「ねえ、急いでいるんじゃないの？」

茉衣が言うと、ボーッと透を見ていた少女はハツと思いだしたかのように、

「あつ、そうでした。失礼します」

と頭を下げ少女は走って行ってしまった。

「そそっかしい子だったね」

美香は少女の後姿を見つめながら言うと、透は頷いて見せた。

「さてと、行こうか」

透達は中に入って行くのだった。

午後は明日の準備のため休みになっていた。

透達は部屋の中に入ると明日の準備をしていた。

「明日の実技の試験って何やるんだっけ？」

圭介は実技用のユニフォームをチェックしながら透に聞く。

「明日は、えーと確か、射撃と200mトライアルだよ」

200mトライアルとはライフルを持った状態でホフク前進を50mと、丸太で組まれたハードルを飛び越えたり潜ったりを交互に繰り返すのを100m、残りの50mは重装備（銃やそのほかに必要な装備）を持った状態で走るといふ、正規軍訓練向けを簡略した競争である。採点方法は持ち点を100の減点方式である。

「トライアルか」。苦手なんだよな。特にハードルが」

圭介が肩を落としていると美香が圭介に隣にやってきて、

「そんなに肩落とすと、そのうち腕が落ちるよ」

圭介をからかいだし、ケラケラと笑いだした。

それを無言のまま圭介は聞いていて腹が立ってきたのかだんだんと彼の顔が変わり始め、

「アー、蹴飛ばすぞ、ゴルァ」

半分ふざけた状態で圭介は立ち上がる。

「そうそう、こういうのが圭介じゃないと」

いまだ、ケラケラと笑いながら言う。どうやら美香なりに励みしだったようで透も美香につられ笑い出すと、

「あつ、透まで笑い出すと……よし、脳内裁判の結果が出た
！！」

いきなりの脳内裁判に、

「いきなり!？」

と美香、

「早すぎ」

いつの間にか透の後ろで隠れるような格好で言う茉衣。

「久々に出たか脳内なんたら……で、判決は？」

孤児院のときはよく聞いたフレーズがまさかここにきて聞けるとは思わなかったので透は苦笑いを浮かべている。脳内裁判なのだが死刑いがいに聞いたことがない。

「茉衣ちゃん以外、速攻死刑」

そう言い終わるといきなり、圭介が透に襲いかかってきた。

透は右へ左へと避けながらドアの前に立ち、

「こんな程度か。落ちたものだな、圭介」

透は圭介に安い挑発をする。

「なにをー！！」

その挑発に簡単に乗ってしまう圭介は、透に掴みかかるように襲いかかる。

それをひらりとかわすと同時にドアを開ける。

圭介は勢い余ってドアの向こう、つまり廊下に出て行ってしまった。それを見た透は二やりわらい、

「少し頭を冷やしてこいよ」

透は手を振りながらドアを閉め、鍵をかけた。

透達が圭介を放置してしばらくたったころ鍵を開けるとすぐに圭介が入ってきた。

「どう？ 頭は冷えたか？」

圭介は頷いたのを見た透は、

「それは、よかった。それじゃ、夕飯でも食べに行きますか」

透はそう言つと、

「もうこんな時間なんだ」

美香は時を見ると、十八時を指していた。

そして、透達は食台に向かうのであった

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9159k/>

Black Back

2010年12月5日06時10分発行